

修禪寺・寺報
Shigetsu

平成27年

8月21日

観音さまが再建立されました

「修善寺平和観音」に

ついて思うこと

埼玉県草加市

鈴木 茂雄



▲戦前の観音様

先日、「修善寺さま」から、お電話による別件で寺報「指月」への「修善寺平和観音」に関する執筆依頼がありました。日頃、色々とお世話になっている小生は、いとも簡単にお受けしてしまい後悔の念に駆られるしだいであります。（後悔、先に立たずかも・・・）

しかし、お受けした以上は執筆にあたり自分へのプレッシャーを感じながら何とか書き上げることが出来たと思いますので、稚拙な短い文書ではありますが御読み頂けることを御願い申し上げます。

ところで小生、故郷の修善寺温泉を離れること約四十五年が経ち、現在、埼玉県に住んでおり望郷の念から、この歳になって「修善寺の歴史」に興味を持ち始め色々調べおてりました。小さい頃は、父母から余り修善寺についての歴史は詳細に聞かされておらず、今となつては非常に

残念で仕方ありません。このような状況の中で年に3〜4回帰省しお墓参りをするのですが、その時お寺さまの裏山に登り、途中で台座のみ残った不思議な構築物を発見したのでした。は何だろうと思う疑問を生じましたが、その時はハッキリとした事は分かりませんでした。やがて時が経過して、偶然にもインターネット上で戦前における「修善寺観音」の絵葉書を見ることが出来、正に残っていた台座は観音さまの物に間違いなくと確信いたしました。この観音さまは金属製のものであり、御国の戦争のために役立てようと梵鐘と共に戦具製造として供出されたこととです。そして、大変残念なことに梵鐘・観音さまともに戻って来くることはありませんでした・・・。その間ずっと台座だけ残った裏山の風景は、ただただ物悲しく切ない思いに満ち溢れておりました。

お寺さまの話によりますと、観音さまを奉納した御方は明治時代に日本橋付近で緞通物商をしていた日高屋「高橋為三郎様」で、とつても弘法大師を尊敬し信仰心の熱い人物とのことでした。また、この他に、「修善寺いろは道」（修善寺〜奥の院約5km）には石碑を建立され「桂谷八十八ヶ所巡拝コース」の一部にもなっております。

小生は、お寺の裏山に観音さまが鎮座してないことを残念に思い、ある日、戦前の修善寺観音像写真（絵葉書）を「吉野真常」御住職の下に持参し、早く復興して頂くことを御願いたしました。その甲斐あってか今年の五月二十一日に観音菩薩像の開眼法要があり、「修善寺平和観音」と命名され、立派な白御影石の観音像が完成したのです。

このことは、小生の願いが通じ望外の喜びとなりました。（謝謝！）

「修善寺平和観音」の御顔を拝見すると、自宅の床間に飾ってある掛軸（修善寺第三十八世住職「丘球学老師」作）に描かれている観音さまに似て、とても優しく慈愛に満ちた眼差しが窺えます。

観音像建立にあたり長い間、裏山治山工事に携わり御尽力頂いた方々には、この場をお借りしまして深い敬意を表したいと思ひます。なお、この「修善寺平和観音」建立に寄せる願いが「世界平和」に届きますよう、そして「修善寺さま」同様に修善寺温泉の「名所」として末永く繁栄し皆様方に愛され続けますことを祈願して、筆を置かせて頂きます。

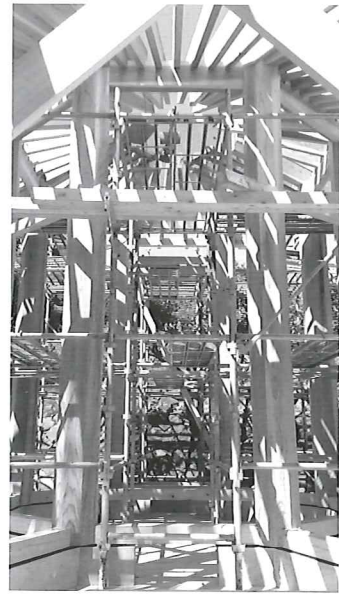


▲開眼法要風景



後方より

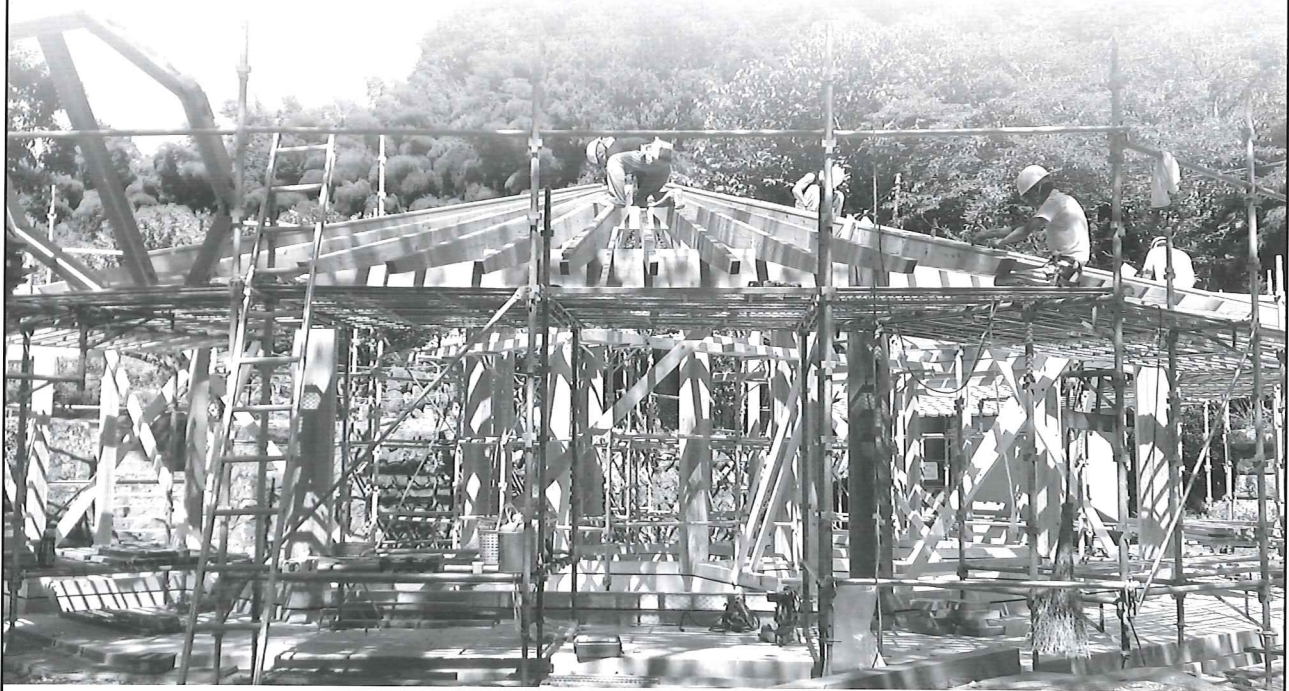
奥之院護摩堂 新築工事状況



正面護摩壇付近

前号でもご紹介しましたように、奥之院護摩堂の新築工事に關しまして、去る3月23日に地鎮式を行い、目下、着々と工事が進行しております。

秋の完成を目指しております。て、9月2日10時より上棟式（建て前）、12月22日の星まつりで完成式典『落慶式』を執り行う予定です。

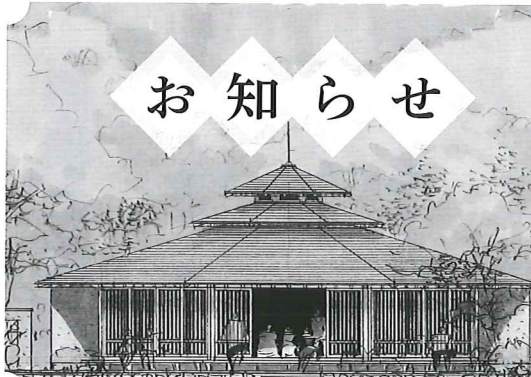


お知らせ

■ ■ 奥之院星まつり
■ ■ 護摩堂落慶法要

◆日時 平成27年12月22日(火) 13時より

◆場所 湯舟 奥之院護摩堂



創作精進料理

修禅寺御膳

●食ルーツの本旨に迫る、作る、味わう。

提供：修善寺調理師会

！分紹介。下。ベック



「修禅寺御膳」

修善寺調理師協会

今回の修禅寺御膳では、新緑の「みどり」をイメージし、食材・調理法・演出で現し献立構成を致しました。

空豆・クレソン・こごみ・芽きやべつ・グリーンアスパラの葛あん仕立、笹・い草のちまき寿司と菖蒲の葉等々、一つ一つの素材の持ち味を生かすは無論、五感で堪能していただければと考慮し、修善寺調理師会一丸となり調整致しました。

お蔭様にて十六回目を迎えた今回も好評を戴き、盛祝裡に終えた事皆々様に誌上をお借りし厚く御礼申し上げます。向後も修禅寺御膳ブランドの更なる深化を目指し精進致す所存でおりますので引き続きの御贖、御支援の程お願い申し上げます。

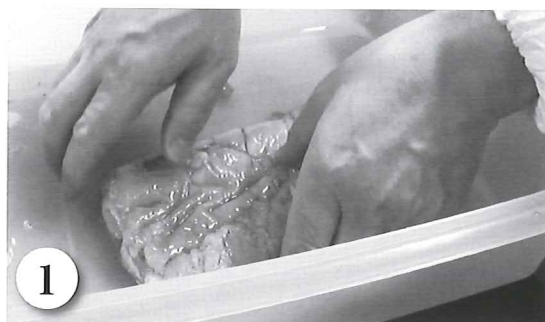
材 料

- 車麩……………1本
- 和辛子…………適量
- 片栗粉…………適量
- 精進出汁…適量
(昆布・乾椎茸・干瓢・大豆・小豆)
- 油………(揚げ用)

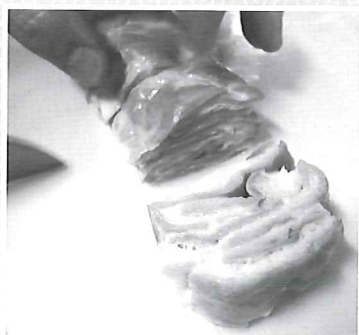
《 調味料 》

- 濃口・薄口醤油、砂糖、味醂
- 酒、たまり醤油

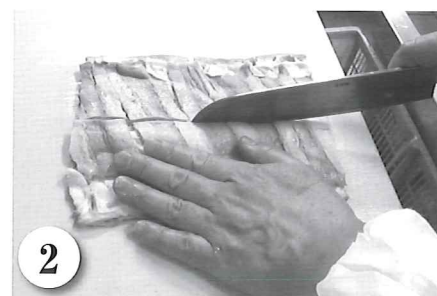
修善寺御膳 角煮もどき



1 車麩は戻した後、板状に開き精進八方地に漬ける。
(精進出汁14:薄口醤油1:味醂1)



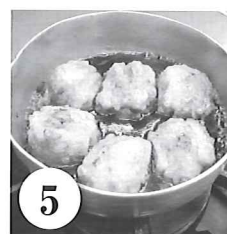
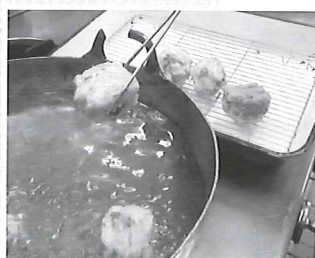
3 片栗粉を麩と麩の間に
付け重ねた後、角に切る。



2 下味をつけた車麩を軽く絞り、4等分に
切る。



4 更に片栗粉をまぶした後、
170℃の油にて揚げる。
(色づくまで)



5 精進出汁、濃口
醤油、砂糖、味醂、
酒、たまり醤油で
調味した地にて
煮含める。



器に盛りつけ、
和辛子をのせる。

完 成

修善寺御膳

修善寺調理師会が地場
産品を使い、腕によりをか
けて作り上げた修善寺な
らではの創作精進料理で
す。期間限定の予約制に
つき詳しくは観光協会
(TEL.0558-72-2501)へ
お問い合わせ下さい。





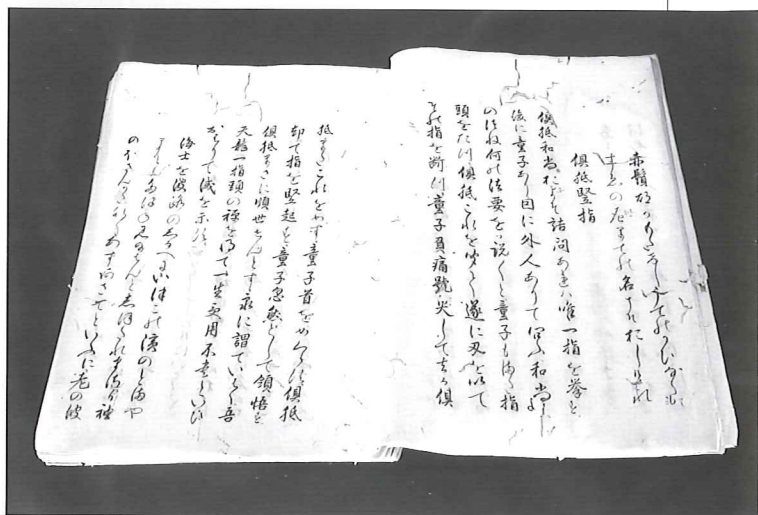
鑑賞

修禪寺

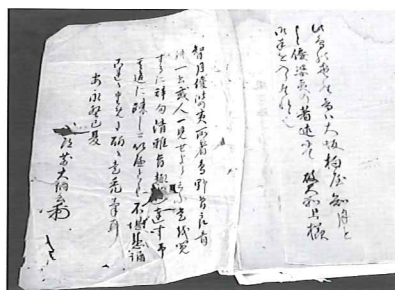
今回の修禪寺寺宝紹介は書物『鳥の空音(とりこのそらね)』をご紹介します。

本書は、江戸時代の思想家、飯塚染子(1665～1705)が書き残した『鳥の空音』に、高僧慈雲尊者が自身の解説を加えたものの写本であります。

飯塚染子は江戸幕府將軍徳川綱吉の側近、柳沢吉保の側室です。



とり そらね ●鳥の空音



宝物紹介

四人の子供を早世させた悲しみから人生の意味を問うようになり、『無門関』と出会いその難解な公案に挑みます。『無門関』は、簡単に言えば、全部で48則からなる禅の公案集です。

染子は日本の古典はもとより中国の古典にも造詣が深く、その幅広い知識と鋭い洞察力で『無門関』について随想的要素の強い文章で綴り、

その内容には謡曲・漢詩・和歌などの引用が見られ、染子の文学的力量の深さと共に禅の境涯の高さが顕われているとして研究者のあいだで高く評価されています。

実は『鳥の空音』は、染子があくまで自分の思索のために書き残したもので、後世に残すことを意図して書かれたものではありませんでした。それが染子の死後、慈雲尊者が自身の思索をさらに書き加えたのです。これにより、時代を超えた思想家同士の対話調、『鳥の空音』が完成したのであります。

染子の自筆本は伝存不明ですが、相当転写されたようで、修禪寺蔵の本書は、染子が没して約70年を経た安永2年(1773)に京都の公家「入道前大納言」によって書写されたことが巻末の款記からわかります。昭和17年(1942)臨済宗南禅寺派管長の柴山全慶老師が本書を転写し、臨済宗の古刹・廣園寺(八王子市)から私家版として刊行されています。

また、近年では、2013年に文学博士の島内景二氏により本書を現代語訳し、さらに『鳥の空音』が生まれてから現在に至るまでの経緯と校訂本文を掲載した研究書が発行されました。

修禪寺 山内衆紹介

◆修禪寺におります僧侶・スタッフの紹介コーナー。



鈴木幹宏さん
すずき かんこう

鈴木師は平成八年(十二年)に修禪寺の勤務僧として在籍され、このたび平成二十二年より同じく勤務僧として再上山されました。お葬儀や法事、修禪寺の行事等で皆様にお目にかかるかと思ひます。

師寮寺(実家)は瓜生野の昌徳院副住職であります。みなさま宜しくお願いいたします。

行事・イベント あれこれ

修禪寺のお盆

八月一日夜、お盆のご先祖さま総供養が行われ、法要後には『修禪寺寄席』『盆踊り』がにぎやかに催されました。寄席では、久しぶりに紙切りの水口ちはるさんが登場。見事なはさみさばきで素晴らしい仕上りの作品に場内は大盛り上がりでした。



花祭りと記念講話

お釈迦様の生誕を祝う「花祭り法要」が生誕日三日前の四月五日(日)に本堂にて厳修されました。法要後には吉備文化財修復所代表牧野隆夫先生により「修禪寺に伝わる仏像」と題して記念講話が行われました。牧野先生は昭和五十九年に修禪寺の御本尊さまを解体修復し、実慶の作品であることを発見した先生であり、昨年には山門の仁王像修復にも携わりました。



行事



〈九月〜十二月のお寺の行事です〉

●九月十五日(火) 午前十一時
「源範頼公墓前供養」

●九月十八日(金) 午後六時半
「観音講」

●九月二十三日(水) 午前十時
「秋彼岸会法要」

●十一月七・九日(土・月)
「桂谷八十八力所巡拝」

●十二月十日(木) 十一時
「釈尊成道会」

●十二月二十二日(火) 十三時
「奥之院星まつり」

「奥之院護摩堂落慶式」

●十二月三十一日(木) 午後十一時
「除夜の鐘」

御寄附

○春季弘法忌に際し

・野菜 たくさん
・タオル たくさん

おてらのやぎ



この春からお寺にやぎが仲間入りしました。春にお母さんやぎが三頭の子供を産み、現在四頭で元気に裏山の雑草を『除草』しています。

○もみじ苗木

―伊豆市 飯山修二様

―静岡市 鈴木茂様

―葦山寺家 古屋俊行様

―東伊豆町 酒井昌彦様

○餅つき用ウス

―南町 小針憲直様

○竹ぼうき

―十本 中里 三須裕之様

○タオル

―四十枚 小山 波多野久江様

○ぞうきん

―たくさん 伊豆の国市 石上のぶ子様

―清水町 小野寺晏代様

―佐野 飯田 さと様

火曜坐禅会

一月〜七月二十一日までの参加者数のべ 三八一名

編集後記



・・・暑い・・・去年もかなりの猛暑だったが今年は更に暑い夏となっている。朝の作務掃除を終えると早朝であっても汗びっしょりである。長い日を考えるとうんざりする。

こんな気候のとき聞かれることばがある。

「心頭滅却すれば火も亦た涼し」

戦国時代の禅僧「快川紹喜(かいせんじょうき)」が寺を焼き討ちせんと迫りくる織田軍に対して発した言葉として有名である。

どんな苦痛であつても、心の持ち方次第で無痛であるという教え。大自然と一体となる、無念無想の境地に至れば、火さえも涼しく感じられるという。

そういえば、灼熱の甲子園で白球を追う球児たちは暑くてやつてられねえといった態度を誰ひとりとしてとっていない。はつらつと、ひたむきに。そう、猛暑と一体となっているのだ。まさに「心頭滅却」である。

では、はたしてじぶんは？

：到底滅却できそうにない：
更なる修行が必要である。

◆指月編集担当 博隆 記

無常者即仏性

住職 吉野 真常

六祖大師は、言われた。

「無常は即ち仏性なり。有常は即ち善惡一切諸法分別心なり」と。

すべての者・物は、一時も留まる事なく移り変っている。今・ココと言う移り変って行く時と場所に存在している。そして、その存在している今・ココは、

二度と戻ってこない。すなわち、やり直すことができないものであります。今・ココに誠を尽くすしかないでしょう。生きているのですから。今・ココに誠を尽くしていると、おのずから、生きる事が楽しく、喜べます（喜心）。すべての者や物に本当にやさしくなります（老心）。何ごとにも囚われなくなります（大心）。これは、小生六十年間生きてきた実感です。



五月二十一日修禪寺裏山に観音石像（高さ二・一メートル・台座を含め四・六五メートル）が建立され開眼法要が厳修されました。以前、この地に安置されていた観音像は金属製の為、第二次世界大戦のおり供出されるという憂き目に遭ったのです。その後約七十五年間裏山には、台座だけが、取り残されていました。そしてよくその台座には、張り紙がされていたのです。「早く再建して下さい」と。

昨年、修禪寺護持会より寄進のお話しを戴きました。折しも折り山口石材店を通じ観音像のお話しがあったのです。この観音像は、この残された台座にあわせ、特別に作った物ではありません。いろいろな因縁により、この地に参りました。実を言うと、観音さまの方からこの地を選んでおいで下さったようなのです。まるで風のように空気の様に、この地に立ってしまっただけです。

小生、この観音さまを『修善寺平和観音』と命名致しました。修禪寺ではなく修善寺としたのは、寺だけでなく町民、いや皆様一人一人のものと言う意味合いです。以前の旧観音さまは、戦争の為に供出させられました。観音さまの心に反して。観音菩薩さまの無垢清浄の慈光を以って三毒（一、貪・むさぼり。二、瞋・いかり。三、痴・愚かさ。）の人心を浄化し、真に世界平和が実現することを夢みて『平和観音』としたのです。

修善寺平和観音が立つ修禪寺裏山も

少しづつ整備されています。裏山には、昔ながらの山道があり、古い沢山の碑や石仏達が置かれています。裏山の整備が終った暁には、この裏山の古道並石仏群を『修善寺平和観音古道』として世に問うてみたいと思うのですが。

奥之院護摩堂の建設も順調に進んでおります。十二月二十二日十三時よりの星まつりに合わせて落慶式を予定しております。

奥之院護摩堂と謳っておりますが、実の所、護摩を焚くのは年一回、星まつりの時だけなのです。そういう訳で、もちろん護摩も焚くのですが、通常は、葬儀会場（修禪寺檀家以外でも使用可）やイベント・コンサート等でも使用していただけたらと考えています。最近、葉室麟著『銀漢の賦』を読みました。その中に蘇東坡の「中秋月」という漢詩が出ておりました。

暮雲收盡溢清寒

（暮雲収め尽して清寒溢れ。）

銀漢無聲轉玉盤

（銀漢声無く玉盤（明月）を転ず。）

此生此夜不长好

（此生、此の夜、長くは好からず。）

明月明年何處看

（明月、明年何れの処にて看ん。）

さ。小生、明年は、いずれの処で明月を見るのだろうか。楽しみだな。